

電話のベルが、待ちかねていた博士の前で鳴った。彼は、それに手をのばした。受話器の奥の漆黒から、低い声が伝わってきた。

「もしもし、ご主人はおいでですか」

「ああ、わたしが」

「有名なエストラ博士に、まちがいありませんか」

「まちがいないが、いったい、どなたです」

「それは申しあげられませんが、用件については、おおよそ、お察し下さったのではないでしようかね」

声の終りは、冷たい笑いに変った。

「あつ、ではおまえが……」

と博士は声をとぎらせた。相手は平然とした声。

「その通り。博士のお子さんは、ちゃんとここでおやすみになっていらっしゃいます」

博士は声をふるわせた。

「わたしの大切な子供を連れ去るとは、どういうつもりだ。まだ、生まれて一年にもならない子を……」

「そんなに大切なお子さんなら、自動車のなかにおいて、用たしなんかに行かないことですか」

「あ、やはり、あの時につれ出したのか。ちよつと雑誌を買いに下りただけだったのに。さては、前からねらっていたのだな」

「まあまあ、博士。じたばたしないで、科学者らしく現実を認めたらどうです」

「いったい、なんで、そんなことをしたのか。わたしにうらみでもあるなら、わたしに対して行なつたらどうなのだ。卑怯な……」

「いや、わたしには博士へのうらみなどありません。むしろ、尊敬しているぐらいです」

「では、どういうつもりなんだ。妻も悲しみのあまり、ねこんでしまった」

この時、相手の声は気がかりらしい響きをおびた。

「まさか博士、警察に届けたのではないでしょうね」

「いや、まだ届けてはない。万一の場合を考えて、もうしばらく電話のかかるのを待つことにしていたところだ。だから、子供だけは傷つけないでくれ」

「さすがは博士、それだけお話がわかれば、ご心配はおかけしません。お子さんのことは大丈夫。では、さつそく取引きにうつりましょう」

「取引きだと。しかし、子供をさらって金を要求する罪の重いことは、知つての上だろうな」

「それは知つての上ですよ。だが、へんなことをなさつたら、お子さんがどうなつても知りませんぜ」

「ま、まつてくれ。いくら欲しいんだ」

「どつくばらんに申しましよう。博士が完成されて秘密にしておられるといううわさの、ロボットの設計図」

「えつ。いや、それは困る」

「お困りになるのは、勝手ですがね」

「あれは、わたしが世の悪をこらすために作ったものだ。おまえのような者の手に、渡すわけにはゆかぬ。額は望み通りにするから、なんとか金ですましてくれ」

「でも、博士がいつもおつしやるように、研究は金で買えませんのでね。それに、その設計図を金にするのは、きつと、わたしのほうが博士よりうまいでしょうよ」

「ああ、なんとやつだ。おまえは、それでも人間か」

「その通り。ロボットでない証拠には、ちゃんとの通り欲があります」

「おまえのようなやつは、生かしておけぬ」

「どうか、興奮なさらぬよう。お子さんをおあずかりしていることを、お忘れなく」

「うむ、やむを得ない。取引きに応じよう」

「そうですよ。それでこそ賢明な博士です」

「しかし、わたしの坊やは、たしかにおまえのところにいるのだな」

「そのことは、ご心配なく。そばの長椅子の上で、さつきからずっと、おとなしくおやすみですよ」

「そうか、それでほっとした。しかし、念のために声を聞かせてくれ」

「まだ、なにもしゃべれないでしょうに」

「いや、泣き声でいいのだ。泣き声さえ聞かせてくれれば、わたしも安心して取引きに応じよう」

「いいんですかい、泣かせても」

「わたしは坊やの無事なことを、たしかめたいのだ。ひとつ耳を引っぱってみてくれ。坊やはどういうわけか、耳の神経が敏感で、おとなしく寝ている時でも、耳を引っぱればすぐに泣き出す」

「変な癖ですね。まあいいでしょう。やってあげましょう。だけど、泣き声を聞きつけて、ひとが来るとうるさい。窓をしめきってからにしますぜ」

「それは勝手だ。気になるなら、ドアにもカギをかけておいていい」

「なんですって」

「なんでもいい。早く泣き声を聞かせてくれ。無事な証拠を示してくれ」

「お待ちなさい。いま、やってあげます。それがすんだら、取引きの方法に移りましょう」

相手の声はしばらくとぎれ、窓をしめているらしい音がした。

そして、小さな声が聞こえた。

「坊や、おとうさんが泣き声を聞きたいとき。痛くても、ちょっとがまんしな」

博士は受話器を耳に押しつける手に力を加えて待った。はげしい爆発音が響いてきた。

受話器をもとにもどした博士は、うれしそうに笑った。

「耳が引き金になっていたとは、気がつくまい。悪人がまた一人へった。」